参考資料１

令和５年１１月２２日
企　画　調　整　局

北九州市基本構想　素案

北九州市が目指す都市像

つながりと情熱と技術で、

「一歩先の価値観」を実現する

グローバル挑戦都市・北九州市

ひとの数だけ、スポットライトがある。
だれもが主人公になって、イキイキと
自分の人生をもっと好きになって進んでいく。

一人ひとりに宿る力を、
もっと支え、挑戦を後押しできる都市へ。
積み重ねてきた歴史を、
脈々と継承し、新しい価値を生みだせる未来へ。

多様な個性がまざりあい、つながりあうからこそ
生みだされる価値は、日本のみならず世界へと大きく広がり、
だれもが豊かで安らげる未来をつくっていきます。

つながりと情熱と技術で、
「一歩先の価値観」を実現するグローバル挑戦都市へ。
さあ、愛さずにはいられない未来を、北九州市から。

目　次

第１章　北九州市の挑戦　３～６

１　北九州市の歩みと個性　３

２　北九州市が考える「一歩先の価値観」　５

第２章　目指す都市像の実現に向けた３つの重点戦略　７～10

１　３つの重点戦略による「成長と幸福の好循環」　７

２　３つの重点戦略　９～10

（１）「稼げるまち」の実現　９

（２）「彩りあるまち」の実現　９

（３）「安らぐまち」の実現　10

第１章　北九州市の挑戦

１　北九州市の歩みと個性

（１）五市合併前

本州と九州各地との結節点という地理的な特性から、江戸時代には、城下町の小倉をはじめ、大里、黒崎、木屋瀬などが宿場町として栄えるなど、北九州地域は、古くから発展を遂げてきました。

大きな転換点となったのは、日本の産業の近代化の礎となった官営八幡製鐵所の操業でした。筑豊の石炭に加えて、アジアに近く、災害リスクの低い強靭な土地や、豊富な水源を有していること、そして何より次世代の産業を創るという地元人の情熱が、明治政府の一大プロジェクトの立地の決め手となりました。

（２）五市合併による多彩な歴史や文化

昭和 38 年（1963 年）、門司、小倉、若松、八幡、戸畑、それぞれ色合いが違う五市が対等合併し、九州初の「百万都市」「政令指定都市」として、北九州市が誕生しました。

・陸上と海上運輸の集散地として栄えた九州の玄関口・国際貿易港「門司市」
・城下町時代からの商業・行政等の集積地で広域的な拠点機能を担った「小倉市」
・国内有数の炭鉱地帯・筑豊で産出される石炭の積出港として栄えた「若松市」
・日本の産業革命に貢献した官営八幡製鐵所創業の地「八幡市」
・工業人材教育へ向けて私立明治専門学校(現九州工業大学)が創設された「戸畑市」

歴史や文化、祭り、食、暮らしなどの旧五市の特色は、「７区７色の個性」として北九州市の個性となりました。

（３）「ものづくり」のまち

官営八幡製鐵所の操業により幕を開けた「ものづくり」のまちとしての北九州市は、重化学工業を中心とする国内有数の工業地帯、また、戦後の日本の高度経済成長をけん引する地として、急速に発展しました。

この勢いが求心力となり、革新的な技術で世界と戦う、進取の気鋭に溢れる起業家が次々と現れ、日本を代表する、株式会社安川電機や TOTO 株式会社などの企業が育っていきました。

（４）多様性・包摂性など市民の個性

「ものづくり」のまちとして、国内外から情熱や個性あふれる人々や企業が集まり、人情と包摂性にあふれる北九州市民は、その多様性を受け入れ、チャレンジを応援してきました。

また、外から取り入れた異質な文化と地域の文化が掛け合わさることで、人々の暮らしは豊かで活気のあるものになっていきました。

（５）公害の克服

日本の高度経済成長をけん引してきた工業地帯として発展する一方で、激甚な公害も経験しました。

「七色の煙」や「死の海」と評された環境汚染の克服のため、「子どもの健康を守りたい」という強い思いを抱く、婦人会が立ち上がり、それを契機に企業と行政も一体となって公害を克服しました。

こうした「市民力」や「産学官民連携の力」は、現在のまちづくりにも引き継がれています。

（６）環境産業の推進

公害克服において、産学官民が総力を挙げて課題解決に取り組んだ結果、環境改善を果たしただけでなく、その過程で、環境に配慮しつつ、生産性も向上させる新たな技術を開発しました。

さらに、廃棄物処理と処分場の不足が日本全体で大きな社会課題になる中、廃棄物を原料として、再び資源に生まれ変わらせるリサイクル産業を創出し、「環境と経済」の両立を図ることにも成功しました。

リサイクル産業が集積する北九州エコタウンは、日本最大級のエコタウンとして国内外から高く評価されています。

（７）環境先進都市から SDGs 未来都市へ

公害克服やリサイクル分野などでの海外技術協力や、上下水道インフラの輸出などを通じて、アジアを中心に環境問題の解決にも大きな貢献を果たしてきました。

公害克服、環境産業の推進、国際技術協力などの歴史のもと、「環境先進都市」として、国内外で高く評価された北九州市は、その後、「SDGs 未来都市」として、環境面のみならず、経済面、社会面を含めた統合的な取組みにおいても評価されています。

（８）「安全なまち」へ

まちを悩ませていた暴力団の影についても、市民・企業・警察・行政が一体となって、暴力追放運動や防犯パトロールに強い決意で取り組んだ結果、暴力団はほぼ壊滅状態となり、刑法犯認知件数は大幅に減少しました。「怖いまち」のイメージは払拭され、北九州市は「日本トップクラスの安全なまち」へ生まれ変わろうとしています。

２　北九州市が考える「一歩先の価値観」

オイルショック後の「鉄冷え」による製造業の合理化、1980 年代半ばの円高による製造業の海外移転などが、北九州市の経済活動を直撃しました。

さらに、工業都市と支店経済都市としての両面を持ち合わせる九州最大の拠点都市でしたが、陸路から空路にシフトする時代に対応できず、企業の流出が相次ぎます。

次第に、人口も減り始め、まちも人も徐々に元気を失ってきました。

少子高齢化に伴う人口減少が急速に進展すれば、社会経済への影響が避けられません。社会経済の中核を担う、いわゆる生産年齢人口が減少することは、企業活動や消費活動が衰退し、経済規模の縮小や国際競争力の低下、さらには、年金や健康保険、医療・介護サービスなど社会保障制度の維持も困難になるなど、市民生活にも大きな影響を及ぼすことになります。

日本全体でも、少子高齢化の進展により、平成 20 年（2008 年）の約 1.3 億人をピークに、2050 年代には 1 億人を切ることが予想される中、地方においては、東京圏や地域の拠点都市への若い世代の人口流出などにより、人口減少が深刻化しています。

アジアにおいても、韓国は 2020 年から、中国でも 2022 年から、人口減少のステージに突入しています。両国とも日本より合計特殊出生率が低いことから、少子高齢化のスピードはさらに速く、近い将来、人口減少問題に直面すると考えられています。

また、1990 年代以降の長く続いた景気低迷の中、個人主義や権利主義の意識の拡大、ライフスタイルや価値観の多様化などにより、かつての共助や互助の精神が薄れ、地域コミュニティの存続も危ぶまれる状況となっています。

さらに、気候変動問題に対応するためのカーボンニュートラルや GX、デジタル化という世界で大きな社会変革の潮流が生まれている中、日本は経済成長や学術振興、女性活躍などの分野において、その地位が年々低下しています。

地方自治体や日本全体、さらには世界が持続的に発展していくうえで、大きな岐路を迎えています。

これまで、北九州市は、明治の産業革命や公害といった時代の変化が他都市に先駆けて現れ、そのたびに市民や企業などの英知を結集し、課題を解決してきました。

また、時代の最前線で、新しいことに挑戦する文化も根付いています。

だからこそ、日本、アジア、そして世界の社会課題の解決のために、何を成しえるのかという視座と使命を備えたまちといえます。

北九州市は、地理的優位性、人の温かさ、技術、インフラなどの数えきれないポテンシャル、また、先人から脈々と引き継がれる、不屈の精神を備えています。
これからも、カーボンニュートラルやデジタル化といった大きな社会変革の潮流に対応していきながら、新たな産業構造への転換などによる経済成長の実現によって、都市の総合力を高めていくことで、こうした様々な社会課題の克服に挑戦していきます。
そして、その経験を日本国内にとどまらず、アジアや世界の国々に向けて発信し、貢献することで、多くの人や企業が集まる活気あふれるまちとして再び輝きを取り戻します。

この挑戦の過程においては、これまでの北九州市の歩みを振り返りつつ、私たちが、未来に向けて、確固たる歩みを進めるための拠りどころとなる「一歩先の価値観」が重要となります。

北九州市のこれまでの歩みや強み、都市の DNA などから、北九州市が描く「一歩先の価値観」とは、

・市民一人ひとりや企業が自身の持っている力を最大限に発揮する「能力開花（エンパワメント）」
・市民が相互に包摂性を持ち、それぞれが望む生活や夢の実現に向けて支え合う「利他の精神（アルトゥルーイズム）」
・地域が直面する課題を地域の力で解決し、活力を取り戻した豊かなまちを次の世代に引き継ぐ「持続可能（サステナブル）」

などであると考えています。

社会経済状況、技術革新はめまぐるしいスピードで変化しています。こうした中においても、北九州市は今後も、時代に先駆けた「一歩先の価値観」を体現できるまちであり続けられるよう、挑戦を続けます。

第２章　目指す都市像の実現に向けた３つの重点戦略

１　３つの重点戦略による「成長と幸福の好循環」

全国的に少子高齢化が進む中、特に北九州市は政令市の中で最も高齢化率が高く、死亡数が増加していることなどにより自然動態のマイナス幅が拡大し、人口減少が急速に進んでいます。
また、市内総生産額は平成 12 年（2000 年）以降、約３兆８千億円を上限に推移し、その水準や増加率（令和元年度、平成 23 年度比）は、政令市の中でも下位に位置しています。
市民一人当たりの雇用者報酬で見ても、その増加率（令和元年度、平成 23 年度比）は、政令市の中でも下位に位置するなど、経済成長も停滞傾向が続いています。
さらに、市の財政状況においても、財政構造の弾力性を示す「経常収支比率」や、財政の余裕度を示す「財政力指数」は、政令市の中でも下位に位置しており、市民一人当たりの「市債残高」（普通会計）は、政令市の中で最も高くなっている状況です。

このように、今、北九州市は、まち全体が活力や元気を失っている状況です。
こうした現状において、まずは、「稼げるまち」の実現に最優先で取り組むことにより、都市の経済力を高め、市外に流出している若者や女性などにこのまちに留まってもらい、市外からの転入者を増やす戦略が重要となります。
このため、まず、北九州市が有する歴史や文化、自然、食、人、産業など、様々な魅力に関する情報を全国の人たちに届け、恵まれた陸・海・空のネットワークを活用して北九州市を訪れていただき、ふれていただき、関心を高め、体験していただく取組みを強化します。
また、ものづくりや環境分野の技術を生かした未来産業の集積や、市内企業の生産性向上、スタートアップの創出など、企業活動の進出や拡大を通じて、誰もが活躍できるまちの実現にも取り組みます。

「稼げるまち」が実現され、年齢や性別、国籍に関わらず、挑戦意欲のある人たちが集まってくることで、物心両面での多様なライフスタイルへのニーズが高まっていきます。
こうしたニーズに対応するためには、民間の投資や開発などを喚起し、魅力的な街並みや住環境、教育環境、文化芸術・スポーツに接する環境、観光などのコンテンツが充実した「彩りあるまち」を実現することが求められます。

「稼げるまち」、「彩りあるまち」の実現による、成長の果実をこのまちに住む人たちの生活の基盤である安全･安心な暮らしの確保につなげるとともに、人々がお互いを尊重し、支え合う包摂的で心豊かに暮らせる「安らぐまち」の実現につなげていきます。

人々を惹きつける「安らぐまち」は、人々が住み続けたいまちであるだけでなく、その魅力によって、市外からもさらに人が集まるまちにつながります。こうして、まちが潤っていく好循環を実現していきます。

「少子高齢化・人口減少」という解決困難な課題に挑戦し、「まちの成長」と「市民の幸福」の好循環というロールモデル（＝課題解決の道筋）を日本やアジアに示して、貢献します。

こうして、日本国内や世界における北九州市の評価を高め、さらに国内外から人や企業を呼び込むまちとなることで、北九州市民の自信を回復し、シビックプライドの向上にもつなげていきます。

私たちは、「人々とのつながり」や、「人情・熱い思い」、そして「ものづくりの技術力」という北九州市のポテンシャルを最大限に発揮して、目指す都市像である『つながりと情熱と技術で、「一歩先の価値観」を実現するグローバル挑戦都市・北九州市』を実現します。

２　３つの重点戦略

（１）「稼げるまち」の実現

我が国は今、地球規模の気候変動や、少子高齢化・人口減少など解決が困難な課題に直面しています。

このような中、北九州市は、激甚な公害をはじめ、様々な社会課題を克服してきた人々の情熱や「ものづくり」の技術力など、北九州市が有する様々な経験とポテンシャルを最大限に発揮して、こうした新たな課題の解決にも挑戦します。

その過程において、産学官のさらなる連携により、未来志向の新しい産業の創出や集積を図るなど、「社会課題解決と経済成長の両立」を実現し、それをショーケースとして示すことで、国内外から人や企業、投資を呼び込みます。

さらに、スタートアップ企業の創出の支援に加え、民間主導による、市内企業の生産性向上や高付加価値化などを促進します。

こうして、若者や女性、高齢者も障害のある人も自らの夢に挑戦する意欲ある人々が集い、多様な個性が調和することで、強い経済を実現し、活力あふれる「稼げるまち」を目指します。

（２）「彩りあるまち」の実現

性別に関わらず、若者も高齢者も、障害のある人もない人も、自らの目標に向かって挑戦する人々が集まり、社会に参加し活躍することにより、まちに活力と賑わいが生まれます。

それにより、人々の生活は豊かになり、消費への意欲が高まります。

こうした人々の、ゆとりある、心豊かな生活に対するニーズに応えるため、民間投資なども活用して、自然と調和した生活環境やまちの空間整備に取り組みます。

また、子ども一人ひとりの個性や多様性が尊重され、持てる可能性を発揮できる教育の推進や、生活を健康で心豊かにする文化・スポーツの振興、そして、豊かな自然と歴史を生かした観光資源の磨き上げなどにより、魅力あふれるまちづくりを進めます。

このことにより、住む人々のまちへの愛着が深まり、感性豊かでクリエイティブな人たちなどを惹きつけるまちになることで、さらに、輝く個性が調和する「彩りあるまち」を目指します。

（３）「安らぐまち」の実現

「稼げるまち」や「彩りあるまち」の実現により、多様な人々が集い、暮らす時、最も基本的で大切なことは、誰もが日々の暮らしに安心と安らぎが感じられるまちづくりです。

そのため、子育てや保健・医療・介護・福祉などの分野において質の高いサービスが提供されるよう、そして、防災や防犯などの分野では行政と民間、地域が一体となって市民の生命・財産を守る仕組みづくりに取り組みます。

また、人々の生活を支える道路や水道、都市の規模に適したコンパクトで質の高い公共施設などの都市基盤を維持していきます。

こうした安心と安全を基礎として、子どもから高齢者まで、障害の有無、性別、国籍に関わらず、誰もが人と人とのつながりの中で、お互いを尊重し合い、それぞれが望む生活や夢の実現に向けて一歩先に進むために、温かく支え合う「安らぐまち」を目指します。

令和５年１１月２２日
企　画　調　整　局

北九州市基本計画　素案

北九州市基本計画　素案

第１章　計画の策定にあたって　２～４
　１　計画の構成　２
　２　計画の期間　２
　３　計画の見直し　２
　４　計画の推進体制　３
　５　計画と地方版総合戦略の関係　３
　６　市政変革による基盤づくり　４
第２章　「稼げるまち」の実現
～人も企業も潜在力を開花できるまち～　５
第３章　「彩りあるまち」の実現
～輝く個性と楽しさがあふれるまち～　８
第４章　「安らぐまち」の実現
～誰もがつながるアットホームなまち～　10
第５章　人口増に向けた道筋　12
第６章　主要な成果指標　14
第７章　７つの個性が輝くまちづくり　16～29
　１　門 司 区　16
　２　小倉北区　18
　３　小倉南区　20
　４　若 松 区　22
　５　八幡東区　24
　６　八幡西区　26
　７　戸 畑 区　28

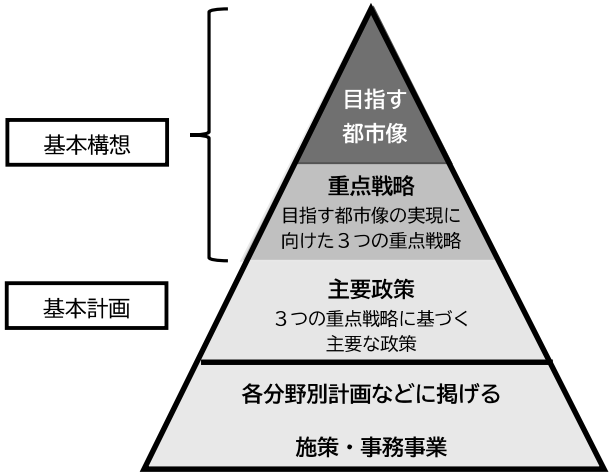
【参考】北九州市の人口の現状と将来見通し　30～34
【参考】これまでいただいた主な意見　35～37

第１章　計画の策定にあたって

１　計画の構成

基本計画は、今後の北九州市のまちづくりの方向性を明らかにした基本構想を実現するために、取り組むべき主要政策の体系や方向性をまとめたものです。

また、基本計画に掲げる主要政策は、「（仮称）北九州市産業振興未来戦略」をはじめとする各分野別計画などに基づき、毎年度の予算編成において、選択と集中の考え方のもと、施策や事業として具体化し実施していくこととしています。



２　計画の期間

基本計画の目標年次は、令和 22 年（2040 年）とします。

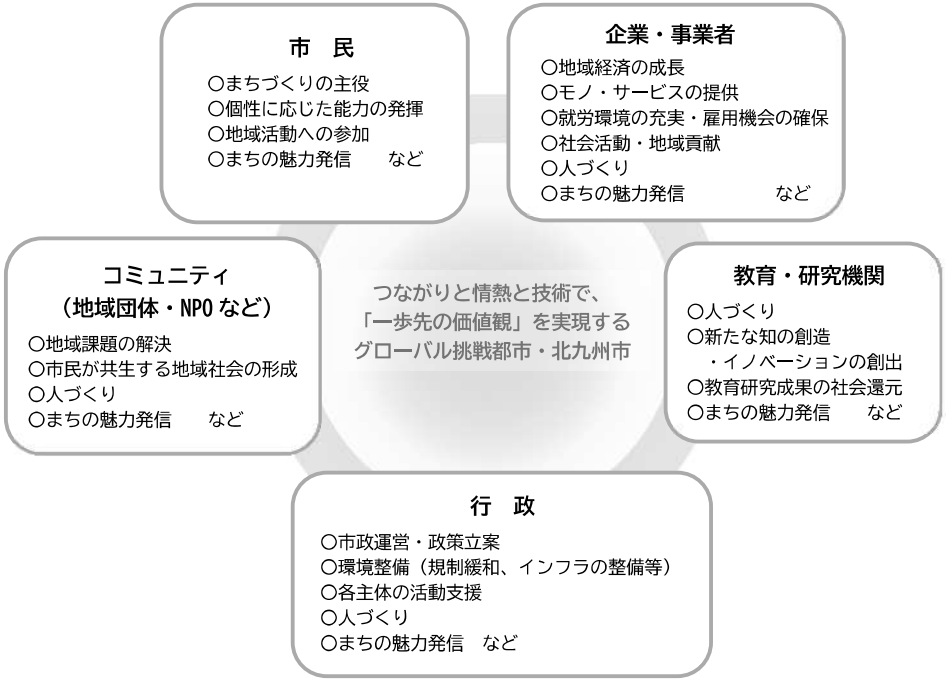
３　計画の見直し

社会経済情勢や市民ニーズの変化、計画の進捗状況などに応じて、概ね５年ごとに内容を検証し、適宜、計画の見直しを行うこととします。

４　計画の推進体制

基本計画に掲げる政策を、産学官民などの各主体がそれぞれの役割を果たすとともに、総合力を発揮することで、一丸となって推進します。

＜ 各主体における役割のイメージ ＞



５　計画と地方版総合戦略の関係

人口減少に歯止めをかけるとともに、東京圏への人口の過度な集中を是正し、将来にわたって活力ある社会を維持していくことを目的に、平成 26 年（2014 年）11 月に「まち・ひと・しごと創生法」が制定され、北九州市では、同法に基づき、令和２年（2020 年）３月に地方版総合戦略として「第２期北九州市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定しています。

今後の地方創生の取組みの方向性は、この基本計画に掲げる方向性と合致することから、地方版総合戦略は基本計画に包含し、一体的に取り組みます。

６ 市政変革による基盤づくり

北九州市では、社会経済上及び財政上の様々な課題に直面しており、基本構想・基本計画に基づいた行財政運営を将来にわたって着実に進めることができる行政組織とするためには、行財政運営のあり方を変革する必要があります。

そのため、「北九州市政変革推進プラン」を令和5年度中に策定し、市政運営そのものの変革に繋げることを目標とした「市政変革」の取組みを進めます。

この「北九州市政変革推進プラン」に基づき、基本構想にベクトルを合わせ、財政状況を改善した上で、経済社会構造の変化に柔軟で機動的に対応し、各局室が自主的・自律的な経営判断と事業実施を行うことができる市役所の体制づくりを行います。この取組みを着実に進めることで、基本構想で示す「目指す都市像」の実現に向けた基盤づくりを行います。

第２章　「稼げるまち」の実現　～人も企業も潜在力を開花できるまち～

「稼げるまち」の実現にあたっては、産学官の連携により、陸・海・空のネットワークの構築や近隣市町との連携などの「稼げる基盤」を強めていくとともに、若者や女性をはじめとした多様な人材の就業や起業を後押しする「稼げる人」の育成を進めていきます。

また、若者に魅力ある企業の誘致に加えて、民間主導による、企業の魅力や生産性の向上、新規分野のビジネス展開など、「稼げる産業」を創出していきます。

こうした取組みによって、まちの「経済力」を高めることで、「人も企業も潜在力を開花できるまち」を目指していきます。

１　稼げる「基盤」をつくる

（１）陸・海・空のネットワークの構築

24 時間運用で Sea＆Air 輸送が可能な海上空港である「北九州空港」の滑走路 3,000 メートル化を契機として、国内外からのさらなる物流需要の取り込みや、利便性の高いアクセスの強化、旅客路線ネットワークの拡大に取り組みます。また、都市間の連携強化や、産業集積促進のため「下関北九州道路」の早期整備などによる道路網の充実や、北九州港におけるコンテナ・フェリーなどの物流、カーボンニュートラルポートなどの機能強化にも取り組みます。

（２）メガリージョンの推進

福岡市や下関市、18 市町で構成する連携中枢都市圏をはじめ、北部九州エリア全体で大規模都市圏（Greater 北部九州圏）を形成することで、アジアを見据えた産業や人材の集積、観光誘客、都市インフラ整備などを推進します。

（３）新たな産業用地などの創出

未来産業や物流産業などの企業誘致の受け皿となる新たな産業用地を創出するため、官民連携による先進的な事業手法の導入（規制緩和）や土地利用規制の見直しなどを推進します。

２　稼げる「人」を育む

（１）スタートアップの創出・成長

地域経済の発展や社会課題の解決に向けたイノベーションの担い手となる、スタートアップ企業や人的資源の創出・成長を支援します。また、未来の起業家を育成するため、学生期からチャレンジ精神や創造性・実行力を育むアントレプレナーシップ（起業家）教育を推進します。

（２）若者のチャレンジへの支援

若者がこのまちで、自らの夢に向かって挑戦・活躍できるよう、学生期において、企業、地域、行政などとの協働により、SDGs の視点も踏まえ、まちづくりや社会課題に主体的に関わる機会を創出します。また、文理問わずすべての学生の基礎的なデジタルスキルの取得・向上や、市内及び市外の新規学卒者や第二新卒者などの若者の地元就職を促進します。

（３）性別に関わらないキャリア形成の支援

結婚、出産、子育て、介護を迎えても、性別に関わらず個人が希望する形でキャリアの継続、向上を図り、働き続けられる社会を構築するため、仕事の継続や復職の意欲向上に向けた取組み、働き方改革などを推進します。また、地域における子育て支援、在宅生活を支える介護サービスの充実などにより、子育てや介護を担う世代が安心して働ける環境を整備します。

（４）多様な人材が働くことができる環境の整備

年齢や障害の有無に関わらず、活躍の場を広げ、経済的な自立を促進するため、デジタル分野をはじめとした学び直し（リ・スキリング）や就労情報の提供・マッチング、企業の健康経営などの理解促進や就業環境の整備を促進します。また、外国人材の日本語能力や技能・技術を向上させることで、さらなる活躍や定着につながるよう支援します。

３　稼げる「産業」をつくる

（１）「バックアップ首都構想」の推進

物流インフラや産業用地などの都市基盤の整備、特区制度の活用や産学官の連携による新技術や新事業の創出などにより、災害時においても日本の社会・経済活動を支えるための拠点として、首都圏などの企業の本社機能やデータセンターなどのバックアップ機能を集積します。また、若者に魅力ある IT やエンターテイメントなどの分野について、海外企業も含め誘致に取り組みます。

（２）成長の芽となる「未来産業」の振興

時代の流れとともに産業構造がめまぐるしく変化する中、レジリエントな（柔軟性がある）強い経済を実現し、まちの活力を向上させるため、ものづくりの「技術力」や学術研究都市の「知的資源」、高度・専門的な「人的資源」を生かしながら、将来の市場拡大が予測される、半導体、次世代自動車、宇宙などの未来産業の育成・集積に取り組みます。

（３）「（仮称）北九州グリーンインパクト」の推進

カーボンニュートラルの実現に向けて、環境と経済の好循環によるグリーン成長を先導する世界のリーディング都市を目指し、風力発電関連産業の総合拠点形成、水素などの再生可能エネルギーの供給・利活用拠点化、社会課題に対応した新たなリサイクル事業の創出などの推進により、グリーン産業の更なる発展を図るとともに、再生可能エネルギーやリサイクル機能など様々な環境価値の企業への提供によって国際競争力の強化を図る「（仮称）北九州グリーンインパクト」を推進します。

（４）物流拠点構想の推進

北九州市の地理的優位性及び各種輸送モードに対応できる物流基盤を生かして、多種多様な物流ニーズと時代の変化に対応できる街を目指し、陸海空の結節点周辺エリアを中心に物流関連施設の集積を図ることで、物流の活性化、物流関連施設などへの民間投資の呼び込み、新規雇用の創出に取り組みます。

（５）生産性向上・高付加価値の推進

DX の推進や AI の活用、ロボットの導入などにより、市内企業の生産性向上や高付加価値化を促進するとともに、成長分野などへの事業転換などを支援します。

また、中小企業に対して、人材確保や資金調達、事業承継などできめ細やかな伴走支援に取り組むとともに、農林水産業では、地元生産物のブランド化、安定生産・増産のためのスマート技術の導入などを支援し、担い手不足の解消や所得の向上を目指します。

（６）アジアの社会課題解決への貢献と国際ビジネスの推進

国際技術協力を通じて培ってきたアジア地域とのネットワークを生かし、関連国内企業の市内集積に加えて、海外からの投資を呼び込むため、環境や上下水道分野のインフラ輸出やスタートアップ企業への支援強化などに取り組み、環境国際ビジネスのハブとなる「（仮称）アジア・グリーン共創ハブ構想」を推進します。

また、先進的な介護システムなどをアジア地域に技術移転することで、社会課題の解決に貢献し、国内外から企業や投資を呼び込みます。

さらに、新たなビジネスチャンス創出に向けて、欧州地域なども視野に入れた都市間連携の可能性を探っていきます。

第３章　「彩りあるまち」の実現　～輝く個性と楽しさがあふれるまち～

「彩りあるまち」の実現にあたっては、民間投資を喚起しながら、魅力的な街並みや生活環境などの「彩りある空間」の整備を進めるとともに、心身に潤いや活力を与える文化芸術・スポーツの振興、観光地の魅力向上などにより、市内外の人々が「彩りある時」を体感できる環境を整備していきます。

また、多様で質の高い教育環境の充実により、子どもたちの個性を尊重し、将来の可能性を引き出して「彩りある人」を育みます。

こうした取組みによって、まちへの「愛着」や「求心力」を高めることで、「輝く個性と楽しさがあふれるまち」を目指していきます。

１　彩りある「空間」をつくる

（１）都市の魅力を高める「まちなみ」づくり

都市の魅力や価値を向上させるため、小倉地区などを中心に、居心地がよく、出かけたくなる、歩きたくなる「ウォーカブル」なまちづくりを官民連携で推進し、ワクワクする賑わいのある空間を創出します。また、各地域の歴史や自然などの特色を生かした、緑豊かな美しい都市景観の形成を図るほか、集客力や魅力のある商業の振興を推進します。

（２）選ばれる「住まい環境」づくり

充実した生活利便施設や公共交通などの都市インフラ、医療資源に加え、住環境と近接した豊かな自然を持つ北九州市の強みを生かし、利便性が高い地域における土地利用規制の見直しや積極的な民間投資の呼び込みにより、多様なライフスタイルに応える魅力的な住環境の整備を推進します。また、デジタルの活用と、多様な関係者との連携・協働を通じて、公共交通の利便性・持続可能性・生産性を高めます。

（３）デジタルによる「快適・便利・迅速な環境」づくり

AI・RPA の技術の導入など、DX を推進することにより、行政への相談や申請手続きなどの利便性を向上させるとともに、多様化する市民や企業のニーズにスピーディーに対応できる体制を構築します。

（４）人や企業を呼び込む「都市の魅力」の発信

戦略的なプロモーションによる、北九州市の持つ多彩な魅力・強みの発信や、「こどもまんなか city」の推進を通じた、良質な子育て環境が整ったまちとしての発信により、都市イメージの向上を図り、シビックプライドの醸成とともに、国内外から人や企業を呼び込みます。

２　彩りある「時」をつくる

（１）文化芸術やスポーツの振興

生活を健康で心豊かにする文化芸術やスポーツの振興を図るため、多様な文化芸術資源の維持・継承・発展に取り組むとともに、誰もが気軽にスポーツを親しみ楽しめる環境づくりやプロスポーツなどと連携したまちづくりを推進します。また、ICT などを活用し、これからの時代に対応した多様なライフスタイルや価値観に応える文化芸術やスポーツの振興に取り組みます。

（２）エンターテインメントによる賑わいづくり

多くの人が集まり、賑わい、豊かな時間を創出するため、大型コンサートや大規模スポーツ大会などの誘致を推進するとともに、主催者が多様なイベントを開催しやすい環境づくりにソフト・ハードの両面で取り組みます。また、漫画・アニメ・ゲームなどのポップカルチャーのほか、アーバンスポーツの普及など、若者にとって魅力のあるまちづくりを推進します。

（３）観光資源の磨き上げや発信の推進

観光コンテンツとしての魅力やシビックプライドの向上のため、各地域の歴史や文化、自然、産業、食などの資源を磨き上げ、組み合わせて発信していきます。また、ブランド力の向上や、国内外からの観光客の呼び込みにつなげるため、規制緩和による新たな観光機能の創出、MICE 誘致の拡大や富裕層向けの宿泊機能の確保など、質の高い観光サービスを提供します。

３　彩りある「人」を育む

（１）グローバル人材や理工系人材の育成に向けた教育の推進

これからの時代に求められるグローバルに活躍できる人材や、ＤＸ・ＧＸを牽引する人材を育成するため、子どもの頃からの外国語や国際理解教育、理工系教育などの先端的な教育が受けられる環境づくりを推進します。

（２）魅力ある新時代の教育機関の誘致

多様で質の高い、個性を生かす教育へのニーズに応えるため、国内外の私立学校やインターナショナルスクールなどの誘致実現に取り組みます。

（３）将来の可能性を開く教育環境の充実

子どものウェルビーイング実現に向けて、誰一人取り残さない学びや先端的な学びなどにより、「こどもまんなか」で質の高い教育環境の充実に取り組みます。

また、市内大学がそれぞれの強みや特色を生かし、連携を図ることで、日本全体の 18 歳人口が減少する中でも、学生が持続可能で質の高い教育・研究を享受できる環境づくりを促進します。

第４章　「安らぐまち」の実現　～誰もがつながるアットホームなまち～

「安らぐまち」の実現にあたっては、防災や防犯のまちづくり、社会インフラの維持など「生活基盤の安心」を支えることをベースに、質の高い福祉や介護、医療などのサービスが提供されるとともに、多様性を認め合いながら、地域のつながりを感じることができる「暮らしの安心」を支えていきます。

また、希望する人が安心して出産し、育児や子どもの成長を社会全体で支える「子どもや子育ての安心」を感じることができる環境を整備していきます。

こうした取組みによって、まちの「住みよさ」を高めることで、「誰もがつながるアットホームなまち」を目指していきます。

１　生活基盤の「安心」を支える

（１）災害などに強いまちづくりの推進

市民の生命、財産などを守るため、災害に強いコンパクトシティの形成や河川の治水・浸水対策などを図るほか、デジタル技術を活用しながら、地域全体で防災力を高める取組みを推進します。また、消防力のさらなる向上による迅速な消防活動を図るとともに、市民の防災・防火意識の向上を推進します。

（２）犯罪のないまちづくりの推進

市民の防犯意識を高めるとともに、防犯カメラなどの防犯環境の整備を図ります。また、警察との連携による、暴力団ゼロのまちの実現や多様化する犯罪集団への対策を強化し、安全・安心なまちとしての情報発信のさらなる強化を図ります。

（３）社会環境やニーズに即した都市基盤・施設の維持

公共施設の集約再配置や予防保全の強化、社会インフラの長寿命化に向けた点検・工事の推進などにより、都市基盤・施設の維持に取り組み、持続可能で安全・安心なまちづくりを進めるとともに、デジタル技術などを活用した維持管理の高度化・効率化を図ります。

また、将来に渡る担い手を確保するなど、持続可能な建設業の実現のもと、地域のインフラ整備やメンテナンスなどに取り組みます。

２　暮らしの「安心」を支える

（１）多様性を認め合う文化のまちづくり

市民一人ひとりが命の尊さと平和の大切さを認識するとともに、多様性を認め合いすべての人が大切にされていると実感できる社会の実現に向け、人権教育や人権啓発、多文化共生の理解促進などに取り組みます。

（２）誰もが安心して暮らせる環境づくり

子どもから高齢者まで、誰もが年齢や障害の有無などに関わらず、住み慣れた地域で安心して生活を送ることができる環境づくりに向けて、デジタル技術を活用しながら、保健・医療・介護・福祉サービスを維持・充実するとともに、市民の移動手段の確保を図ります。

（３）地域医療提供体制や保健衛生管理体制の充実

デジタル技術も取り入れた救急医療体制の維持など、市民が安心して医療を受けられる体制を確保・充実するほか、新たな感染症拡大による危機に備えた仕組みづくり、食の安全や生活環境の衛生の確保に向けた監視・指導に取り組みます。

（４）地域におけるコミュニティ活動などの活性化

時代の変化に伴う多様なニーズに対応した地域づくりを進めるため、社会貢献意識が高い若者やNPO、子育て・現役世代なども参加しやすい仕組みに強化します。

（５）生涯現役に向けた活動などの活性化

生涯を通じて健康でいきいきと心豊かに暮らすことができるよう、市民の健康リテラシーの向上や健診受診・生活習慣の改善などによるヘルスケアを推進します。また、文化芸術・スポーツ活動などの生涯学習や社会参加を促進し、学習活動と地域・ボランティア活動のマッチングも進めます。

３　子ども・子育ての「安心」を支える

（１）安心して生み育てることのできる環境の整備

市民一人ひとりの結婚、出産、子育ての希望がかなう社会の実現に向けて、保育関係者や地域、NPOなどと行政の連携やデジタル技術の活用により、安心して子どもを生み育てることができる環境を整備します。

（２）子どもの健やかな成長への支援

子どもの健全な育成に向けて、家庭のみならず、地域、学校、関係機関、行政などが連携・協働し、子どもたちを社会全体で見守り、健やかに育む環境づくりを進めます。

第５章　人口増に向けた道筋

市民が日常生活を送るために必要な各種サービスは、一定の人口規模の上に成り立っています。そのため、人口減少が続くことは、将来の社会経済活動に大きな影響を及ぼします。

例えば、人口減少に伴い税収が減少することなどにより、行政サービスや社会インフラの維持が困難になるとともに、小売業、飲食業などの生活関連サービスや公共交通サービスは縮小し、地域コミュニティの機能なども低下します。そして、こうした生活利便性や地域の魅力の低下を通じて、人口減少にさらに拍車がかかる悪循環に陥っていきます。

こうした悪循環を断ち切り、社会経済活動を将来にわたって持続させるためには、人口減少を食い止め、増加への転換に向け、産学官民が一体となって、産業競争力の向上、ハード・ソフト両面の生活環境の充実など、都市の総合力を高めていくことが不可欠です。

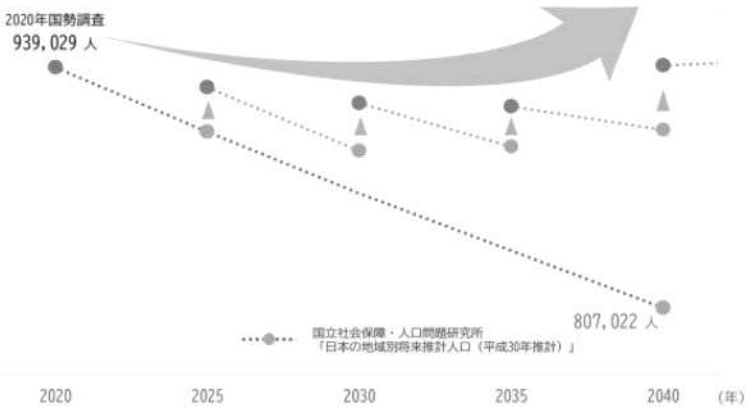
地方において経済活動などの拠点となる主要な都市では、日本全体で人口が減少する中においても、人や企業が集まっています。

そのため、まずは、市内総生産や雇用者報酬の増加などの経済成長の実現、また、都市のイメージアップに取り組み、20 代や 30 代の若い世代を定着させていかなければなりません。

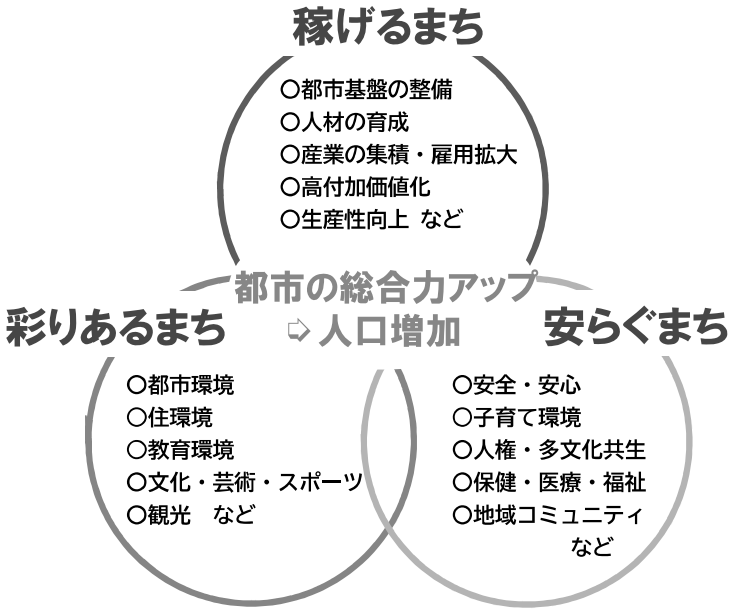
さらに、子育てや教育、福祉、文化、スポーツ、住宅、交通などの生活環境の向上にも取り組み、中長期的な視点で、出生数の増加による自然動態の改善にもつなげていきます。

こうした考えのもと、基本構想に掲げる３つの重点戦略を着実かつ総合的に取り組んでいきながら、「成長と幸福」を好循環させることにより、５年毎に国勢調査を踏まえて推計される将来人口を、常に北九州市の人口が上回る歩みを続け、「100 万都市復活」に向けた道筋をつくっていきます。

＜ 将来推計人口を常に上回るイメージ ＞



＜ ３つの重点戦略による都市の総合力アップ（＝人口増加）のイメージ ＞



第６章　主要な成果指標

指標名	現状値※1	目標値※2	備　考
市内総生産額（名目）	3 兆 6,696 億円	4 兆円 （2033 年度）	―
女性の就業率 （25～44 歳）	75.5%	82.0%	国が掲げる目標値の達成を目指す
商業地地価（小倉） ※主要地点の平均地価	580,000 円/㎡	871,000 円/㎡ （2033 年）	現状値の 1.5 倍を目指す
商業地地価（黒崎） ※主要地点の平均地価	148,000 円/㎡	227,000 円/㎡ （2033 年）	現状値の 1.5 倍を目指す
将来の夢や目標を持っている子どもの割合	小学生　81.1% 中学生　66.8%	精査中	今後策定する次期教育プランとの整合性を図る
合計特殊出生率	1.46	1.8	国の希望出生率の達成を目指す
健康寿命	男性　71.9 歳 女性　75.6 歳	男性　76.0 歳 女性　77.0 歳	政令市１位の水準を目指す
地域活動に参加したことがある市民の割合	50.9%	60%	―

指標名	現状値	目標値	備　考
安全なまちと認識している市民の割合	86.0%	90%	―
北九州市に住み続けたいと思う市民の割合	83.8%	90%	―
北九州市への誇りや自信があると答えた市民の割合	55.0%	80%	―
社会動態	▲48 人 （2022 年）	＋1,000 人	―
推計人口	916,241 人 （2023 年 10 月 1 日）	将来推計人口を上回る人口	国立社会保障・人口問題研究所が５年ごとに公表する将来推計人口を都度上回る

※ 上記の成果指標以外についても精査中

※1　現状値は、2023 年 11 月 20 日現在の公表値。
　　ただし、現状値に括弧書きのある指標を除く。

※2　目標値は、基本計画策定から５年後に達成を目指す数値。
　　ただし、目標値に括弧書きのある指標を除く。

第７章　７つの個性が輝くまちづくり

１　門司区

門司区は、北九州市の北東部にあり、関門海峡を挟み、対岸に本州を望む九州の玄関口に位置しています。

陸、海の交通の要衝であり、世界各国に航路を持つ国際貿易港として発展しました。現在は大型の臨海産業団地やフェリー基地などがあり、日本有数の物流拠点となっています。

歴史的建造物が数多く残っており、美しい街並みを形成しています。また、三方を海に囲まれ、豊かな自然に恵まれる風光明媚な観光のまちでもあります。

（１）地域資源・ポテンシャル

①産業

西日本有数の規模を誇る太刀浦コンテナターミナルをはじめ、新門司フェリーターミナル、北九州貨物ターミナル駅、大型臨海産業団地のマリナクロス新門司など、多くの港湾・物流施設が集積し、日本有数の一大物流拠点を形成しています。

②都市機能

公共施設マネジメントにおけるモデルプロジェクトとして、公共施設の集約・再配置に向けた取組みを進めています。

③観光・歴史

古くから国際貿易の拠点として発展してきた門司区では、明治・大正・昭和初期に建てられた多くの歴史的建造物を見ることができます。

特に門司港レトロ地区では、国の重要文化財に指定されている門司港駅や旧門司三井倶楽部のほか、旧門司税関などが往時の繁栄を偲ばせる街並みを形成しています。また、九州鉄道記念館や関門海峡ミュージアム、観光列車「潮風号」などの観光施設もあり、全国的にも有名な観光名所となっています。

大里地区の門司赤煉瓦プレイスには、大正時代に建造された煉瓦造りの美しい建物が残っており、海岸沿いのレンガ倉庫とあわせて、かつて、三井・三菱財閥と並ぶ大企業だった鈴木商店が築いた一大工業エリアとしての歴史を感じる景観をつくり出しています。

ほかにも、柳の御所や戸上神社、猿喰新田潮抜き穴跡などの文化遺産が数多く残っています。また、壇ノ浦の戦いや巌流島の決闘など、歴史的な戦いの舞台でもありました。

④自然・食

三方を囲む海と風師山や矢筈山などの山々に広がる豊かな緑が、雄大な景色を作り出しています。ほかにも、四季の花咲く白野江植物公園やホタルの生息する井出谷川、松ヶ江北貯水池などがあり、豊かな自然に恵まれています。漁業が盛んな地域でもあり、「豊前海一粒かき」や「豊前本ガニ」、「関門海峡たこ」などは特産品として高い人気があります。

⑤関門連携

関門海峡を挟んで向かい合う北九州市と下関市は、古くから密接な関係を持ちながら一体的な都市圏・経済圏を形成してきました。今後、関門連携の一層の推進により、観光や市民間交流の活性化が期待されます。

（２）まちづくりの方向性

○リゾートの雰囲気が漂い、観光客と地域住民が融合する「観光と生活の場」をまるごと豊富なストックとして捉え、「働く場」や「学ぶ場」との一体化を促進することにより、訪れたい、住んでみたい、住み続けたいまちをつくります。

○門司港レトロ地区をはじめとする各地区の歴史や文化、自然、食などの地域資源を地域の方々との協働により磨きあげるとともに、回遊性を高め、下関市との更なる関門連携のもと、関門エリアの価値向上を図ります。

○太刀浦コンテナターミナルや新門司フェリー、RORO ターミナルなどの港湾・物流機能の強化を図るとともに、航路誘致や広域からの集貨に取り組み、物流拠点化を推進します。

（３）参考とした市民の皆様のご意見

・日常の景色が本当に素晴らしく、時間がゆっくりと流れていて、家に帰ってくるだけで癒される。このすばらしい景色の中で暮らす価値を大事に思う人が増えてほしい。
・住む人、観光で来る人、仕事をする人、色々な人が集まる魅力あるまちにしたい。
・色々な歴史が積み重ねられた地域そのものが一つの教材となっている。まち全体が学びの場となれる可能性を持っている。
・門司でフィールドワークをする際、地域の方々との顔の見えるコミュニケーションや地元の方々から受けるつながりというものに非常に価値を感じている。
・下関を挟んだ関門エリアをはじめ、白野江地区や大里地区などの拠点をいかにして便利に　回るか、きっかけづくりも含めて、考える必要がある。
・魅力を生かした観光と港湾産業の拡大に取り組めば、働く場所、住む人が増えていく。

2　小倉北区

小倉北区は、長崎街道をはじめとした九州五街道の起点であり、古くから陸上交通の要衝でした。江戸時代における城下町の形成を契機に発展してきたまちで、現在も商業や流通、金融、情報、医療、コンベンションなどの都市機能が集積する「北九州市の顔」となっています。

区の中心部には紫川が流れ、足立山、山田緑地など、緑豊かな自然環境にも恵まれています。また、小倉城をはじめ、様々な歴史・文化・芸術施設が数多くあります。

（１）地域資源・ポテンシャル

①産業

小倉駅周辺において、コワーキングスペースやシェアオフィスの整備促進により、スタートアップ企業の創出やサテライトオフィスの設置などを誘引し、若年層の雇用の場や新たなビジネスモデルの創出を図っています。

また、民間開発の誘導と企業誘致の促進を重点的に図るため、補助事業の新設・拡充や容積率などの各種規制の緩和を行う取組みを推進しています。

②都市機能

九州第２位の利用客を誇る小倉駅には、新幹線や在来線、モノレールが乗り入れています。さらに、ここから区内外への路線バス網が広がるなど、小倉駅を中心に非常に高い機能を持つ広域の交通ネットワークが形成されています。

また、同駅の北側には、展示場や国際会議場、ホテルなどの MICE 施設、球技専用のスタジアムが立地しています。さらに、南側には日本で初めて公道上にアーケードが設置された商店街のほかに、オフィス街や繁華街などが広っており、高次の都市機能が集積しています。

③住環境・自然

高い交通機能に加え、雇用機会やアミューズメント機能も充実しており、「住む」「育てる」「働く」「遊ぶ」ための様々な都市機能がコンパクトにまとまっているのが特長です。

また、北九州市のシンボル公園である勝山公園があるほか、足立山や山田緑地、到津の森公園、藍島などの豊かな自然にも容易にアクセスできるなど、住環境としても高い魅力を持っています。

④観光・歴史・文化・食

小倉城や松本清張記念館、北九州芸術劇場、漫画ミュージアム、平和のまちミュージアム、TOTO ミュージアムなど、歴史や文化芸術に関する多様な施設が充実しており、市民はもとより、インバウンドをはじめ、国内外から多くの観光客が訪れる人気のスポットとなっています。また、小倉名物「ぬかみそ炊き」や地元の魚介を使った寿司など、魅力的な食文化も観光資源となっています。

北九州市の台所として、長年にわたり市民に親しまれている旦過市場も観光名所の一つとなっており、現在、安全性の確保とさらなる魅力の向上に向け、神嶽川の改修と合わせた再整備を行っています。

400 年以上の歴史を持ち、国の重要無形民俗文化財に指定されている小倉祇園太鼓や、市民の心を一つに合わせ多くの人々が楽しめる「わっしょい百万夏まつり」は、北九州市を代表する祭りであり、毎年、多くの人が集まり、小倉のまちを賑わせています。

そのほか、日本夜景遺産に認定された足立公園の夜景や小倉イルミネーションなどの観光資源を活用しながら、行政・地域・民間団体が一体となってイベントの開催や情報の発信を推進しています。

（２）まちづくりの方向性

〇高い機能を持つ都市・交通基盤を生かし、オフィスや都市型住宅の集積を促進するとともに、魅力的なエンターテインメントやショップを充実させ、若者やクリエイティブな人材が集まり、北九州市の顔にふさわしい、賑わいと活力がみなぎるまちをつくります。

〇小倉地区において、建物１階の民間部分と歩道や公園の公共部分を、官民が連携して一体的でまちに開かれた快適な空間とし、併せて、沿道の魅力を向上することで、ワクワクして歩きたくなるまちなかを創出します。

〇歴史や祭り、伝統芸能などの継承・振興を図るとともに、その魅力を資源として賑わいの創出やシビックプライドの醸成を図る、歴史と文化を生かしたまちづくりを推進します。

（３）参考とした市民の皆様のご意見

・住まいや交通、公共サービス、商業施設といった都市に必要な機能がコンパクトに集まっていて、暮らしやすくて働きやすいまちというのは小倉北区の重要な強み。
・クリエイターやデザイナーなどの若者のチャンスを作っていくことが大事。
・小倉は若い人がわくわくするまちになっていないとだめ。
・休憩もできて、安全で快適に移動できるようなまちなかの整備が必要。
・安心して生活ができて、面白さ、わくわくの溢れるコンパクトなまち、色んな人が新たな楽しみをもって生活できるような、前向きな明るいまちにしたい。
・自然や歴史、文化、伝統、食などの魅力を更に向上させ、回遊性を高めることが重要。

３　小倉南区

小倉南区は、市内で人口が２番目に多く、最も面積が大きな区です。山、川、海の多彩な自然と田園が広がり、農林水産業が盛んな一方で、自動車関連産業をはじめとした各種企業が立地しています。また、利便性の高い交通網を背景に物流拠点としての重要性も高まっています。

鉄道やモノレール、高速道路などの社会インフラも充実しており、沿線には良好な住宅地が広がっています。

（１）地域資源・ポテンシャル

①産業

九州縦貫自動車道や東九州自動車道、北九州都市高速道路、国道１０号など、東西南北を結ぶ広域道路ネットワークの結節点となっており、その高い物流機能を背景に、臨空産業団地や北九州空港跡地産業団地などには、自動車産業関連企業が集積しています。

現在、恒見朽網線などの整備により、さらなる物流機能の強化に向けた基盤づくりを進めています。

北九州空港は、九州・中四国で唯一、24 時間利用が可能な海上空港であり、将来活用可能な広大な土地を有しています。その特性を生かし、旅客便の誘致に加え、大型貨物機の長距離運航を可能とする滑走路の 3,000m化など、物流拠点化に向けた取組みが進んでいます。

②教育・地域

北九州市立大学をはじめ、高度な技術を学ぶ九州職業能力開発大学校（九州ポリテクカレッジ）や北九州工業高等専門学校など、多くの教育機関が集まっています。

また、全国的にも珍しい一歩上をいく子育ての取組みである「プレイセンター」をはじめ、子育てや健康づくりを通して人がつながり、人と地域が育つ素地があります。

③歴史・文化

曽根古墳群などの史跡が多く残されているほか、昔から農業が盛んな地域であったことから、雨乞いや豊作祈願を芸能化した「楽（がく）」や神々に奉納する神楽、盆踊りなどの伝統行事が地域に受け継がれています。また、小倉南区の誕生とともに始まった「まつりみなみ」は、老若男女が楽しめるイベントとして大切な地域交流の場となっています。

④自然・食

北九州国定公園に指定され、日本有数のカルスト台地として有名な平尾台では、春の野焼き、新緑、秋のすすき野などの四季の変化に加え、鍾乳洞探検（ケイビング）やトレイルランニングなど、他では味わえないアクティビティを楽しむことができます。また、「ソラランド平尾台」には、グランピングやキャンプ場、アスレチックなどの施設が整備されており、様々な体験ができる観光地として人気が高まっています。

ほかにも、カブトガニや渡り鳥などの希少生物の宝庫である曽根干潟や合馬の竹林、菅生の滝、長野緑地など、多様で豊かな自然に恵まれています。

農林水産業も盛んで、全国的に有名な「合馬たけのこ」をはじめ、「小倉牛」や「豊前海一粒かき」などは、北九州市の特産品として人気を集めています。

（２）まちづくりの方向性

○豊かな自然を生かし、四季折々の景観や地域の歴史や文化を感じながら行うウォーキングなどにより、健康づくりや居場所づくりを推進し、元気で生き生きとした生活が楽しめるまちをつくります。

○平尾台や曽根干潟などの自然を生かし、希少な体験ができる観光と学びの場の形成を図ります。さらに地元の特産品や伝統、文化の魅力を加え、質の高い地域ブランドを創出することにより、内外のファンを増やし、交流人口や関係人口の増加を図ります。

○各地域の祭りやイベントを通じて、世代を超えて人と人が“つながろう”という想いを力に変えるとともに、２地域居住の促進などにより、関係人口を増やすことで、地域課題の解決を図り、ずっと住んでいたいと思えるまちをつくります。

○広域道路網の高い物流機能を生かし、物流業や製造業に係る企業の誘致に取り組みます。また、北九州空港のゲートウェイ機能を生かし、「国内外との活発な交流を支える空港」と「九州・西中国の物流拠点空港」の実現に向けた取組みを推進します。

（３）参考とした市民の皆様のご意見

・子どもが五感を使って遊び込める自然豊かな環境があることはものすごい強み。平尾台やカブトガニの居る曽根干潟など、その本質的な魅力と価値を市民はもちろん、日本や世界の人に届けていけば、観光で稼げるまちになる。
・海あり、山あり、川ありと自然豊かな地域。都会にあらず、田舎にあらずで、かつ小倉へのアクセスが良いので、ベッドタウンとしては最適な地域だと思う。
・まつりみなみのような祭りを大切にしつつ、もっと活気のあるまちになってほしい。
・産業を強めたり、空港を生かした国際物流エリアの整備などで雇用を産み出してほしい。北九州空港の活用が小倉南区だけでなく北九州市全体の発展のカギ。

4　若松区

　若松区は、かつては筑豊炭田の石炭積出港として栄え、日本の産業発展を支えてきました。現在は高い港湾・物流機能などを背景に、製造業に係る企業が多く立地するとともに、環境産業や再生可能エネルギー産業の集積が進んでいます。
　周囲を響灘と洞海湾に囲まれ、中央部は広く緑に覆われるなど、豊かな自然に恵まれており、水産物や農産物の生産が盛んな地域です。

（1）地域資源・ポテンシャル

①産業

　製造業が盛んで、特に響灘地区には、広大な産業用地や充実した港湾施設、アジアへの近接性といった優位性から、多くの企業が立地しています。また、北九州エコタウンには数多くのリサイクル関連産業が集積するとともに、近年は、太陽光や風力、バイオマス発電などの再生可能エネルギーの産業拠点化も進んでいます。

②北九州学術研究都市

　区西部にある北九州学術研究都市は、アジアに開かれた学術研究拠点及び新たな産業の創出と技術の高度化を支える知的基盤として開設され、北九州市立大学、九州工業大学、早稲田大学、福岡大学のほか、様々な研究機関などが一つのキャンパスに集積しています。
　ここを拠点に、半導体や自動車、ロボット、AI、環境といった様々な分野において、産学の連携による新技術の開発や新たなビジネスの創出のほか、海外の大学との交流や連携、留学生の支援など、グローバルな視点での教育・研究活動が行われています。

③観光・歴史・文化

　若松南海岸通りには歴史的な建築物や産業遺産が数多く現存しています。国の重要文化財である若戸大橋とあわせて、日本一の石炭積出港として栄えた名残を感じる美しいまちなみを形成しています。
　こうした景色や豊かな自然を背景に、若松が生んだ芥川賞作家である火野葦平の作品「花と龍」をはじめ、数多くの映画のロケが行われています。
　また、「五平太まつり」など、地域の歴史や伝承を伝える祭りが盛んな一方、九州ジャズ発祥の地として、ジャズによるまちおこしも行われています。

④自然

　玄海国定公園に指定されている若松北海岸には夕日の名所として知られる遠見ヶ鼻や千畳敷のほか、市内で唯一の海水浴場があり、海水浴、釣り、マリンスポーツなどを楽しむ人たちで賑わっています。さらに周辺には地場産品の販売施設やホテル、グランピング施設に加え、響灘緑地（グリーンパーク）や響灘ビオトープ、気軽に農業体験ができる観光農園などがあり、多様なアクティビティを楽しめます。

　そのほか、高塔山は、桜やアジサイ、夜景の名所として知られ、昼夜を問わない人気の観光スポットとなっています。

⑤食

　西日本有数の生産量を誇るキャベツをはじめ、ブロッコリー、スイカなどの農産物の生産が盛んです。また、響灘海域は、魚介・海藻類の宝庫となっています。「若松潮風キャベツ」や「若松水切りトマト」、「若松妙見かき」などはブランド化され、その品質を高く評価されています。
　ほかにも区内で栽培されたブドウを使ったワインや若松産ホップを使った地ビールを造る活動も行われています。

（2）まちづくりの方向性

○石炭積出港として栄えた歴史や文化、豊かな自然や農水産物、多種多様な産業の集積など、若松ならではの多様な魅力を生かし、シビックプライドの醸成を図るとともに、誰もが住みたい、住み続けたいと実感できるまちをつくります。

○若松北海岸の豊かな自然や周辺の魅力的な食、アクティビティ、高塔山や若松南海岸の夜景などを活用し、市内外から多くの人が訪れる観光地として、さらなる魅力の向上を図ります。

○物流機能の強化や環境産業などの集積を図るとともに、響灘地区での風力発電関連産業の総合拠点化や水素などの再生可能エネルギーの供給・利活用の拠点化などを推進します。また、半導体や宇宙・次世代自動車などの未来産業の振興に向け、学術研究都市における研究開発強化などに取り組みます。

（3）参考とした市民の皆様のご意見

・豊かな自然やグリーンパーク、海、海岸線、地域住民の結束、若松好きが多いこと、美味しい野菜(トマト・キャベツ)など、いろいろな魅力がある。
・北海岸を中心にした自然や海産物、野菜、果物の収穫体験、自然体験を生かしたアクティブな体験型観光地が増えるとよい。
・若松北海岸がコートダジュールの様なリゾート地になってほしい。
・南海岸には建築遺産が多くあり、観光資源になる十分なポテンシャルがあると感じる。
・歴史のある企業や施設がたくさんあり、地元の人同士のつながりが強い。

5　八幡東区

八幡東区は、官営八幡製鐵所創業の地として、近代日本の発展の礎を築いた地域です。近年は東田地区では先端産業の集積や未来都市づくりが進み、既成市街地では大規模社宅跡地などを活用した新しいまちづくりが進んでいます。

国内有数の夜景スポットとして有名な皿倉山や河内貯水池などを中心に豊かな緑が広がっています。

（1）地域資源・ポテンシャル

①産業

官営八幡製鐵所とともに日本の近代産業を支えた、長い歴史をもつ製鉄関連の企業が集積しています。また、東田地区では、IT、環境、新エネルギーなど、新たな分野の企業集積が進んでいます。現在は、東田・未来都市プロジェクトを展開し、MaaS に向けた実証や各種センサーを用いた人流の把握・分析など、社会課題の解決に向けた先端的な実証・実装事業が行われています。

②都市機能

市内拠点をつなぐ鉄道や路線バスが充実するとともに、国道３号黒崎バイパスや北九州都市高速道路が市街地に直結し、交通アクセスに優れています。

また、北九州で唯一の小児救急・集中治療センターが併設されている市立八幡病院をはじめ、高度な診療機能をもつ総合病院や健診機関が集積しています。

③住環境・地域

桃園公園のスポーツ施設や響ホール、東田地区の各種施設など、スポーツ・文化施設が充実しており、様々な学びや体験をする環境が身近に整っています。

また、九州国際大学や国際協力機構 JICA 九州センターが立地していることから、研修生や留学生などの外国人市民が多く、交流イベントなどを通じて、多文化に触れる機会も恵まれています。

そのほか、学生の長期継続的な地域活動への参加や地域団体による道路や公園を活用した定期的なイベント開催のほか、地域や企業で構成する団体が参加して平成 29 年度に「八幡東まちづくりプラン」を作成するなど、地域主体のまちづくりが進められています。

④観光・歴史・文化・食

写真提供：日本製鉄㈱九州製鉄所

東田地区には、世界遺産関連施設の官営八幡製鐵所旧本事務所をはじめ、東田第一高炉史跡、西日本最大級の自然史・歴史博物館である「いのちのたび博物館」、スペース LABO など、特徴ある施設が集まっています。さらに、スペースワールド跡地への大型商業施設の進出により、市内でも最大級の集客力をもつ地域となっています。

そのほか、明治 34 年（1901 年）から続く「まつり起業祭八幡」や北九州市無形民俗文化財である前田祇園山笠などの伝統ある祭りに加え、製鉄のまちの歴史から生まれた八幡ぎょうざや堅パン、皿倉山の伏流水で造る日本酒に代表される多彩なグルメなど、魅力的な地域資源が数多くあります。

⑤自然

皿倉山や河内貯水池、河内藤園、板櫃川などの豊かな自然が身近に広がっています。また、ケーブルカーで気軽に登ることができる皿倉山は、日本新三大夜景都市である北九州市を代表する夜景スポットであり、壮大で美しい夜景を見ることができます。

このほか、高見地区や前田地区の桜並木、河内地区の紅葉など四季折々の美しい景観を身近に楽しむことができます。

（2）まちづくりの方向性

○歴史ある製鉄関連などの企業や先端産業が集積する東田地区と商店街などの市街地が連携して新たなビジネスの創出に挑戦し、ともに発展するまちづくりを推進します。

○夜景の名所である皿倉山や東田地区の各種施設、河内地区の自然など、高い集客力を持つ地域資源の連携を図るとともに、伝統文化に根差した祭りや食の魅力の活用、宿泊機能の強化などにより、訪れた人たちが循環し、滞在するまちをつくります。

○高い交通利便性や医療・健診機関の充実に加え、様々な体験や学びが身近にできる恵まれた環境を生かし、まちなかにある未利用地の利活用や居住の促進により、誰もが住み続けたくなるまちをつくります。

○製鉄のまちとして培ってきたシビックプライドや、主体的にまちづくりに取り組んできた地域・市民・企業の力をこれからも育み、サステナブルなまちづくりを推進します。

（3）参考とした市民の皆様のご意見

・八幡製鐵所とともに発展してきたまちの歴史、皿倉山、夜景、河内貯水池、環境未来都市づくり、祇園山笠、JICA 国際交流、世界遺産、ミュージアムパークなど、八幡東区にはユニークな強みがたくさんある。
・商店街や地域の活動が盛ん。八幡愛を持つ人が多い。八幡愛で溢れるまちにしたい。
・東田地区の大型商業施設に来た方をどのように循環させるかが大事。日本一の夜景を生かしながら、食などを絡めて宿泊へつなげていくなど。
・皿倉や河内の整備も非常に大事。豊かな自然を整備して観光資源とすべき。

6　八幡西区

八幡西区は、市の南西部に位置し、古くは江戸時代の長崎街道の頃より、交通の要衝として栄えてきました。全体的に平坦な地形で、良好な住環境が広く形成されており、市内において最も人口の多い区となっています。

日本を代表する有名企業が立地するとともに、中心市街地である黒崎地区や学園都市の折尾地区など、それぞれの地域ごとに特色あるまちづくりが進められています。

（１）地域資源・ポテンシャル

①産業

先端ロボットや精密金型、素材、半導体材料などの分野において、世界をリードする企業が立地するとともに、それを支える関連企業群や金融機関、宿泊施設などが集積しています。近年は、物流需要の高まりなどから、九州縦貫自動車道の八幡インターチェンジがある金剛地区に物流拠点としての注目が集まっています。

②都市機能・住環境

交通の要衝として充実した道路網に加え、黒崎駅や折尾駅を中心に、鉄道やバスによる広域的な公共交通ネットワークが形成されています。

黒崎地区では、黒崎駅周辺に区役所をはじめとする公共的機関や文化交流施設、医療施設などがコンパクトに集積しています。商業施設の立地とあいまって、近年はマンションの建設が進み、まちなかの居住人口が増加しています。現在、交通アクセスの更なる向上に向け、国道３号黒崎バイパスの整備を進めています。

折尾地区では、大学や短期大学、高校などの教育機関が集積し、西日本有数の学園都市を形成しています。現在、折尾地区総合整備事業により、学園都市の玄関口にふさわしい地域拠点づくりが進んでいます。

陣原駅周辺や永犬丸・三ヶ森地区、八幡南地区では、鉄道駅周辺の利便性や生活利便施設の充実に加え、瀬板の森公園、金山川、遠賀川などの自然が身近にあり、暮らしやすい住宅地が広がっています。

③観光・歴史・文化

江戸時代には、長崎街道における黒崎宿と木屋瀬宿という２つの栄えた宿場町がありました。現在も、曲里の松並木や木屋瀬宿跡の古いまちなみなどが残されており、当時の風情を感じることができます。

また、400 年前から行われているとされる黒崎祇園山笠などの多彩な祭りが地域に継承されています。

そのほか、石炭輸送に利用された堀川の流域には、水門「寿命（じめ）の唐戸」などの文化財が残っています。

④自然・食

藤の名所である吉祥寺、ホタルの飛翔地の黒川、地域の子どもたちが水と触れ合える笹尾川水辺の楽校、森林浴のできる畑貯水池など、豊かな自然を身近に楽しむことができます。

また、遠賀川流域の水田地帯では、福岡県内で作られる米・麦の種子や酒造好適米など、高品質な農産物が作られています。

（２）まちづくりの方向性

〇産業の振興や雇用の創出により、活力あるまちをつくります。また、長崎街道などの歴史や伝統的な祭りの保存継承により、シビックプライドの醸成を図るとともに、豊かな自然や公園、貯水池などを生かした魅力のあるまちづくりを推進します。

〇黒崎地区では、都市型住宅の集積促進により居住人口の増加を図るとともに、多世代が交わり支え合うまちをつくります。また、個性的、特徴的な店舗の出店促進や賑わいづくりなどにより、歩いて楽しいまちなかを創出します。

〇折尾地区では、学園都市の特性と充実した都市機能を生かし、学生や若者、住民、駅利用者によるにぎわいづくり活動や民間開発を促進することにより、市内外の人が住みたくなるような魅力的なまちをつくります。

〇筑豊電鉄沿線などの住宅地において、高い交通利便性や充実した生活利便施設、四季を彩る自然などを生かし、誰もが住みたくなる住環境ブランドエリアの形成を図ります。

（３）参考とした市民の皆様のご意見

・黒崎は交通が便利で、住むには素晴らしい場所。医療や介護、福祉の事業所が充実し、そこで多世代の交流が活発に行われている。
・折尾は再開発で住宅地としてのポテンシャルや価値が上がっていくのではないか。一方で学生が多いまちなのに、学生が楽しめるような環境が整っていない。
・八幡西区は郷土愛が強く、まちをどうにかしないといけないと強く思う人が多い。
・祭りなどを通じて、子どもたちに自分のまちのことを好きだと言ってもらえるようにしたい。

7　戸畑区

戸畑区は、市内で最も面積が小さく、早くから都市基盤が整備されたコンパクトなまちです。北九州市のほぼ中央に位置し、区域の北側には工場が立ち並び、南側には住宅地が広がっています。

教育や文化、福祉などの都市機能が充実しており、「文教のまち」として、落ち着いた雰囲気のまちなみが形成されています。

（1）地域資源・ポテンシャル

①産業

臨海部には広大な製鉄所を有する工場群が形成されおり、これらの企業や区内の大学などでは、宇宙や DX、GX、半導体などに関する活動に取り組んでおり、未来産業の発展、社会課題の解決、バックアップ機能の強化に資する基盤が整っています。

②都市機能・地域

北九州市の中央に位置し、鉄道やバスによる公共交通網が整っていることから、市内のどの地域へもアクセスが容易です。若戸大橋と若戸トンネルにより若松区とつながり、北九州都市高速道路が小倉北区へと伸びています。現在、広域道路ネットワークの形成に向け、戸畑枝光線の整備を進めています。

戸畑駅や区役所周辺には、複合公共施設「ウェルとばた」のほか、病院や介護施設、保育所、障害者支援施設などが集積し、保健、医療、子育て、福祉のネットワークが形成されています。また、公害克服を先導した戸畑区婦人会の活動が脈々と受け継がれ、住民がまちの環境を守る風土が息づいており、住みやすい生活環境が整っています。

③教育・歴史・文化

九州工業大学や５つの高校など、多くの教育機関が集積しており、学生による地域活動も活発に行われています。

九州工業大学や明治学園を創設した企業家・安川敬一郎の邸宅である旧安川邸のほか、国指定重要文化財の旧松本家住宅や北九州市立美術館など、歴史・文化施設が数多くあり、多様な文化的魅力にあふれる文教のまちとなっています。

そのほか、浅生スポーツセンターなどの施設も充実しており、趣味、教養、娯楽を満喫できるエリアが多数あります。

例年７月には、国の重要無形民俗文化財に指定されている戸畑祇園大山笠行事が開催され、20 万人以上の人が観客に訪れる夏の風物詩となっています。平成 28 年（2016 年）にはユネスコ無形文化遺産にも登録されました。

④自然

花と緑と水辺を生かしたまちづくりを進めており、市民の憩いの場として親しまれている夜宮公園では、四季折々に美しい花々を楽しむことができます。夜宮池や日本庭園には、約 7,000 株の花菖蒲が植えられており、花の季節には菖蒲まつりが開催されています。

都島展望公園や中央公園の金比羅山周辺には豊かな緑が広がっているほか、天籟寺川などの貴重な水辺空間もあります。ここでは戸畑あやめや鞘ヶ谷のホタルなど、地域に生息する動植物に身近に接することができます。

（2）まちづくりの方向性

〇福祉と文教のまちの価値をさらに高め、多世代に魅力ある住環境の形成を図ります。また、学生や若者の活動支援、居場所づくりなどに取り組み、若い世代や地域が活発に交流する活力のあるまちをつくります。

〇歴史でつながる旧安川邸や旧松本邸とそのゆかりの学校を中心に、多様な主体の協働により、住んでいる人や訪れる人が歴史や文化の重みを体感できるような、回遊性の高い、緑豊かな街並みを創出します。

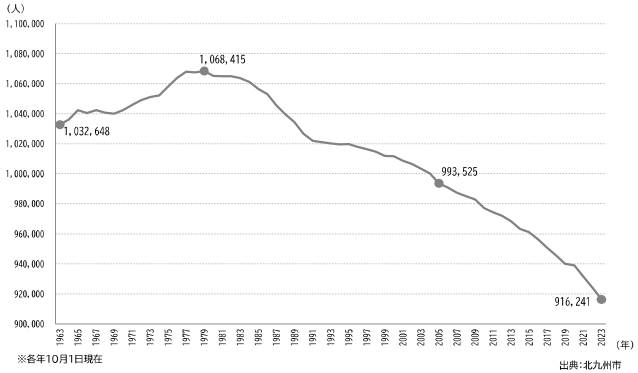
〇世界に誇る戸畑祇園大山笠をはじめとする地域特有の文化や歴史、自然などを生かし、シビックプライドの醸成と賑わいの創出を図ります。

（3）参考とした市民の皆様のご意見

・教育と文化をしっかり育てたまちになればよい。
・戸畑区はとてもコンパクトで動きやすく、教育施設がとても充実している。これは子育て世帯が住むときにとても重視すること。
・戸畑の良さは人が温かいまちだということだと思う。地域の力が本当に強い。
・九州工業大学や明治学園、夜宮公園が一連の緑になっている。これはとても大事な環境。それぞれの管理主体が話し合って、ここを結んでみんなで歩けるようにすると世界的にもアピールになる。
・学生が溜まれる場所がない。友達との交流の場がたくさん増えればいい。学生だけでなく、地域の人とも関われる、そんな場所があったら良い。
・商店街の空き店舗を使った交流の場づくりなど、高校生の力で戸畑が活性化できるような取組みをいろいろ考えている。地域の方や大人の方にも応援してほしい。

【参考】北九州市の人口の現状と将来見通し

北九州市制が発足した昭和 38 年（1963 年）に 103 万 3 千人であった人口は、昭和 54 年（1979 年）の 106 万 8 千人をピークに、減少が続いており、平成 17 年（2005 年）には 100 万人を割り、令和５年（2023 年）10 月現在では、91 万 6 千人となっています。



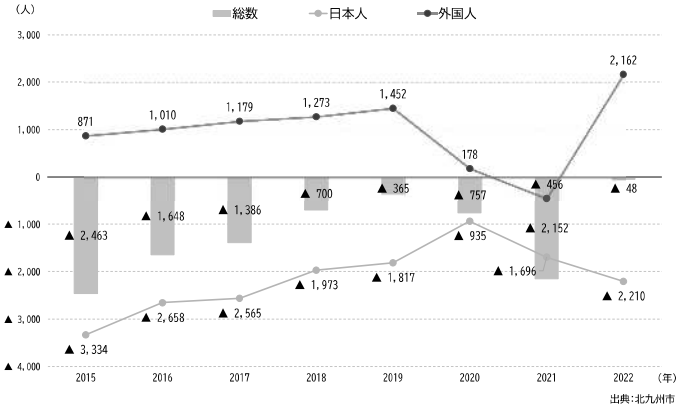
北九州市の推計人口の推移

人口動態は、出生者数と死亡者数の差である「自然動態」と、転入者数と転出者数の差である「社会動態」の増減により影響を受けますが、高齢化率が政令市トップである北九州市の場合、高齢化のさらなる進展によって死亡者数が増加傾向にあり、自然動態のマイナス幅が年々拡大しています。

他方、社会動態については、過去に比べて「転出」超過のマイナス幅は改善傾向にありますが、昭和 40 年（1965 年）以降、「転出」超過の傾向は続いています。

北九州市の自然動態と社会動態の推移

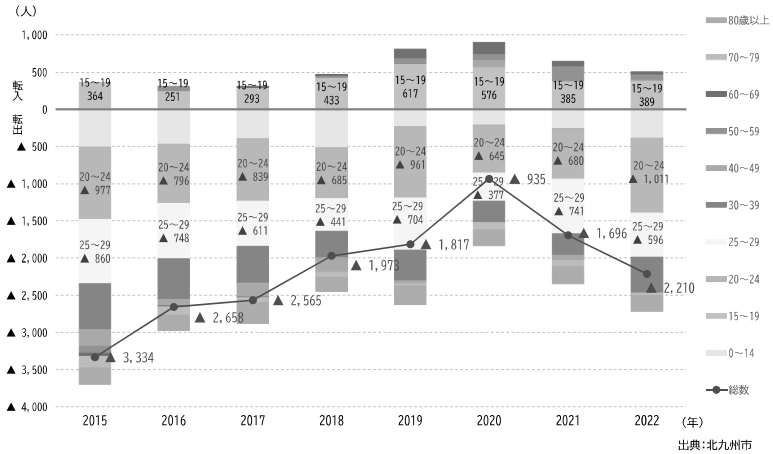
この「社会動態」について平成 27 年（2015 年）以降の状況を見てみると、外国人は転入超過、日本人は転出超過となっています。



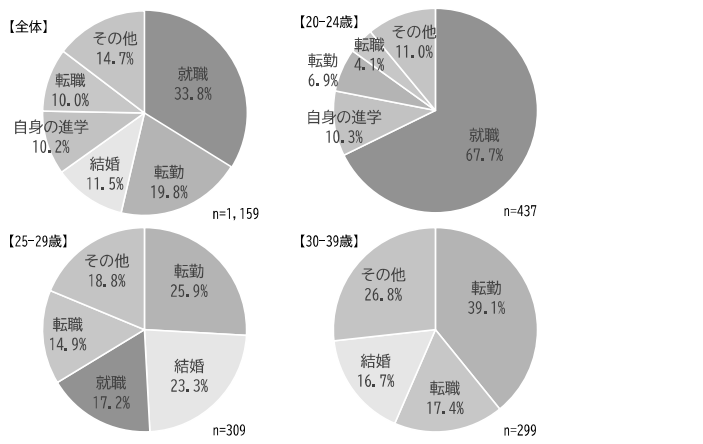
社会動態の推移（日本人・外国人）

転出超過が続く日本人の年代別の状況を見てみると、15～19 歳は、北九州市内に大学などの教育機関が多く所在することから、転入超過となっています。

他方で、20～24 歳、25～29 歳などの年齢は、大幅な転出超過となっており、市外転出者へのアンケート結果からも就職、転勤、結婚、転職などを契機に市外に転出していることが伺えます。



年代別の社会動態の推移（日本人）

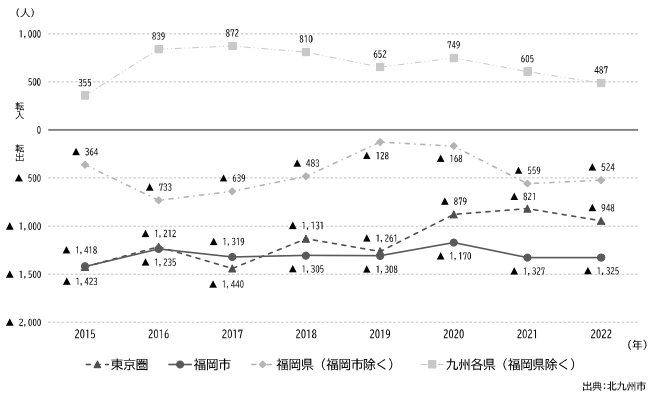


出典：北九州市「令和５年度 市外転出者（18～39 歳）へのアンケート調査」

市外転出者（18～39 歳）の転出のきっかけ

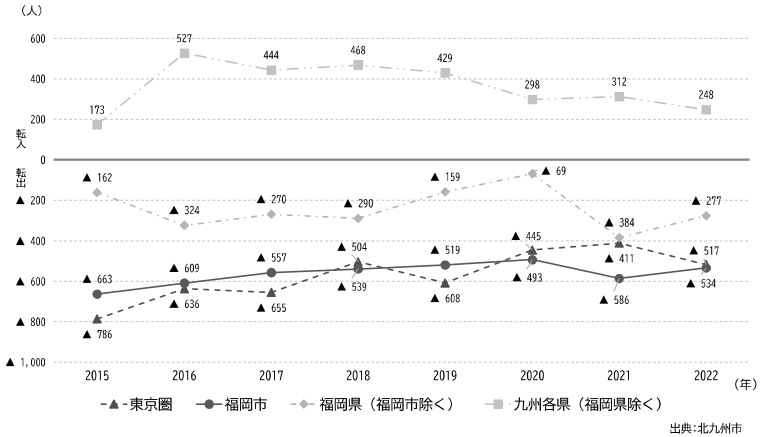
また、主な地域別の社会動態を見てみると、毎年の増減はあるものの、九州各県（福岡県を除く）からは、転入超過となっている一方で、福岡市、東京圏、福岡県内（福岡市を除く）には転出超過が続いています。

特に、福岡市への転出超過数は東京圏を上回っており、また、男性よりも女性の転出超過数が多くなっています。



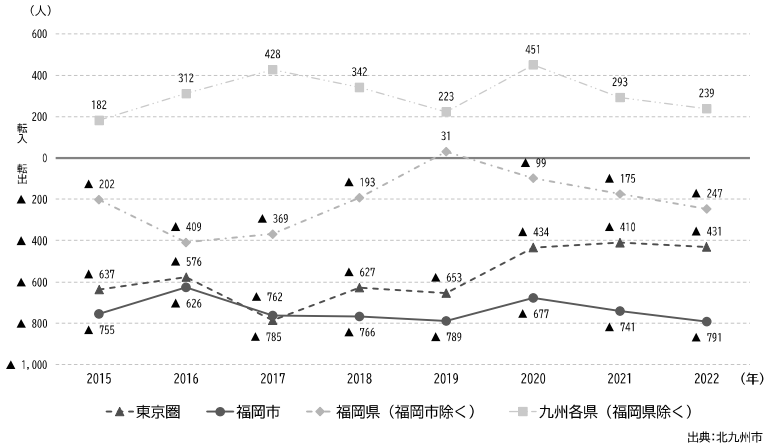
出典:北九州市

主な地域別の社会動態の推移（日本人）



出典:北九州市

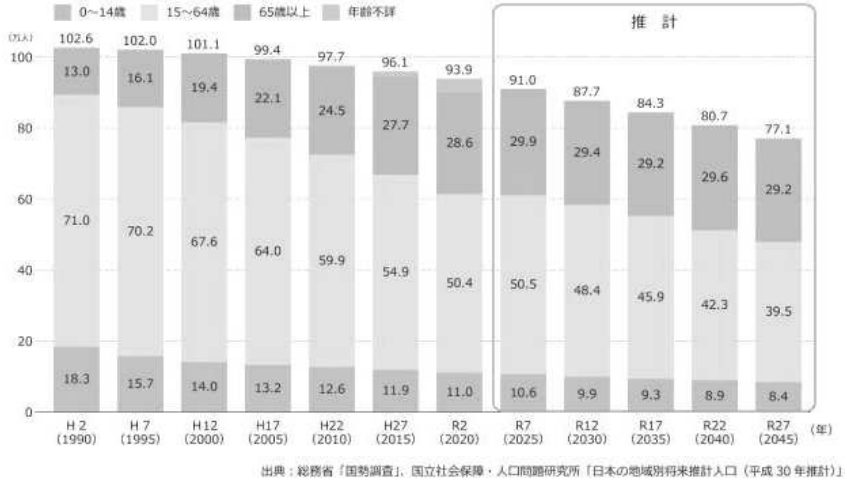
主な地域別の社会動態の推移（日本人：男性）



出典:北九州市

主な地域別の社会動態の推移（日本人：女性）

こうした現状のもと、平成 27 年（2015 年）の国勢調査の結果から国立社会保障・人口問題研究所が推計した、令和 22 年（2040 年）の北九州市の人口は 80 万 7 千人、生産年齢人口（15～64 歳）は、42 万 3 千人と推計されています。



北九州市の将来推計人口

【参考】これまでいただいた主な意見

1　未来に引き継ぐ北九州市の「宝」

（1）人と人、地域との「つながり」

・地理的特性から北九州市民は他所から来た人や文化を受け入れることにとても寛容で、そのことが日本経済をけん引する原動力の一つにもなっていた。
・官営八幡製鐵所が操業して以降、このまちには、全国から多くの人が集まってきた。こうした多種多様な背景を持つ人々が交じり合うことが、活力やエネルギーにつながった。
・小倉祇園太鼓や戸畑祇園大山笠をはじめとする地域の特色ある祭りや歴史的な文化、自然の大切さを、世代間で大事に引き継いできた。
・市民と地域で 30 年間取り組んできた地域福祉の三層構造のネットワークは、これからもまちづくりを支えるものである。

（2）北九州市民の「情熱」

・北九州市民は、一見とっつきにくく見えるところはあるが、実際は人情に厚く、郷土愛（まちへの愛着）が強い。そうした気質が、困難に直面した時にみんなで一つになり、困難を乗り越える力の源になっている。
・産業近代化、戦後の高度成長期に国内外から多様な人々を柔軟に受け入れ、その人々の挑戦を助けたり、応援したりするパワーを持っていた。今もそのパワーは、北九州市民に根付いている。
・高度成長期の激甚な公害を産学官民の連携の力で克服し、その技術と経験が国内外で高く評価されて以降、北九州市は「環境のまち」として広く知られ、そのことはシビックプライドにもつながっている。

（3）ものづくり・環境のまちを支える「技術」

・筑豊炭田があり、石炭産業が栄えた都市で、門司港を起点として物流・人流結節点となっていた。官営八幡製鐵所をシンボルとして、産業近代化、戦後の高度成長を支えたものづくりの基盤は、これからのまちの発展に向けても、強みとして生かすべきである。
・産業近代化に伴う負の側面（公害）が出てきた北九州市では、世界的に環境問題への関心が高まっていなかった時代から、「ものづくりの技術」と「市民の意識」の両面からアプローチしてきた。
・早くから３Ｒ（リユース、リデュース、リサイクル）といった環境問題を着想し、そのコンセプトを磨いて具体的な手を打ってきた先見性とスピード感がある。そして、環境国際協力にも、熱い思いで取り組んできた。

2　未来にチャレンジする「まちづくり」

（1）北九州市の使命

・北九州市から日本を変える、世界を変えるというまちになってほしい。地域志向ではなく世界志向で、この地域が日本に、そして世界にどう貢献するのか、世界的なビジョンを持つまちになってほしい。
・日本全体が衰退国家になってきている今、北九州市が起爆剤になって、日本のリーダー的な役割を果たしてほしい。
・日本は課題先進国と言われているが、その中でも、北九州市が課題を先進的に解決していく都市を目指すことが望ましい。
・先進国はほぼすべて人口減少局面に入っているので、北九州市がリードし、住みやすいまちづくりを進め、都市型のモデルケースを作れば、世界に誇れるまちになる。
・北九州市を本気で変えていこう、発展させていこう、世界から注目されるまちにしようという一丸力が求められている。行政だけでなく民間も含め、人もお金も本気も出し合えば、大きなエネルギーとなる。

（2）稼げるまち

・アジアの玄関口、九州と本州との結節点という地理的優位性と、24 時間利用が可能な北九州空港をはじめとする、陸・海・空の全ての輸送モードに対応した交通物流インフラをさらに生かすことが、このまちの競争力や魅力を高める。
・北九州市は、北九州市のことだけを考えるのではなく、近隣の福岡市や下関市などと連携し、お互いの強みと弱みをうまく補完し合えるような発展の方向を目指してほしい。
・スタートアップなど若い人が挑戦しやすい環境づくりや、リ・スキリングなどにより、このまちの人々の「稼げる力」を強化してほしい。
・性別や年齢、障害の有無、国籍を問わず、きちんとキャリアを積め、適切に評価され、しっかり働ける環境を実現してほしい。
・アジアの現在の課題の多くは北九州市が乗り越えてきた課題であり、少子高齢化は将来のアジアの課題であることを踏まえ、高度な外国人材を受け入れることが、アジアの活力を取り込む交流につながる。
・災害が少なく、豊富な水資源やエネルギーがあるこのまちは、「バックアップ都市」として、日本の非常時に対応できるポテンシャルを生かして、若者に魅力ある IT 関係などの企業誘致や物流産業などの集積をさらに推進してほしい。
・このまちの成長は、これからの成長分野と言われている「情報」「半導体」「新エネルギー」の３分野をはじめとする関連産業をどれだけ取り込めるかにかかっている。
・このまちが生き残っていくには、ものづくりのまちという DNA に、DX や GX、AI など新たな技術を組み合わせ、生産性向上や高付加価値化に取り組まなければならない。

（3）彩りあるまち

・快適で魅力的な都市空間の形成には、歩行者の視点に立った「ウォーカブル」なまちづくりが重要である。また、自然と都会がコンパクトに集約されており、これらを融合させたまちづくりを推進してほしい。
・人々の価値観やライフスタイルが変わる中で、仕事だけでなく、文化芸術、スポーツに親しめ、上質なエンターテインメントを楽しめるような、多様な選択ができるまちであってほしい。
・素晴らしい観光地の本質的な魅力と価値を正しく届けることで、市内外から人を呼び込み、観光でも「稼げるまち」を目指してほしい。
・幼稚園から大学まで多様な選択肢があることが都市の強みである。国内外から人や企業を呼び込むには、グローバル人材や DX 人材を育成する教育の提供や、インターナショナルスクールなどの誘致を検討するべきである。

（4）安らぐまち

・自然災害がほとんどなく、暴力団排除により治安が改善されている。また、生活する上で、道路や水道といった社会インフラや公共交通機関が充実している。市民の暮らしのベースには、安全・安心が必要である。
・医療・介護の施設やサービスが充実しており、子どもから高齢者まで、また障害のある人も、安心して暮らすことができる。
・北九州市民すべてが、自分の尊厳を保ち、他者や社会とのつながりを感じるとともに、自身が属するコミュニティの中で幸福に暮らすことができるまちであってほしい。
・年齢や障害の有無に関わらず、人生を豊かに楽しめるよう、誰もが取り残されない、包摂性のある社会を目指してほしい。
・北九州市の健康寿命は全国平均を下回っているため、まずは健康寿命の引き上げを目標に、健康都市を前面に打ち出し、「シニアがいきいきと生活しやすいまち」を目指してほしい。
・フルタイム共働き世代の保育ニーズに応える環境を整え、性別を問わず、挑戦や活躍を後押しするまちであってほしい。
・常に子どもを真ん中において、子供たちがより伸び伸び生きることができる子どもの幸福度ナンバーワンのまちを目指してほしい。